

ゴルドーニの『イギリスの哲学者』をめぐる 論争について（その1）

—ヤコッベ・モンドウィルは高貴な哲学者か、
それとも卑しい家庭教師なのか—

齊 藤 泰 弘

はじめに

カルロ・ゴルドーニが劇場専属の詩人として、毎年8本の戯曲を提供する契約を結んだサントアンジェロ劇場時代（1748－52年）とサン・ルーカ劇場時代（1753－62年）についての最近の研究を概観してみると、奇妙な現象が目につく。それはサン・ルーカ時代前期（1753－58年）の作品評価だけが、一様に低くなっていることである¹⁾。初期のサントアンジェロ劇場時代は、即興劇から科白劇への演劇改革が着々と進められ、パンタローネなどの時代遅れの役柄を、勤勉で健全な道德を持つ市民階級の象徴へと変身させた時期として高く評価され、とりわけ1年間で実に16本の作品——しかもその多くが初期の代表的な傑作——を生み出した1750年は、奇跡の演劇シーズンとして後世からも讃えられている。また、サン・ルーカ劇場時代後期（1759－62年）は、《ヴェネツィア的世界》（*venezianità*）への回帰による、彼の代表的な傑作が続々と生み出された実り豊かな時期である。だが、その両者の間に挟まれたサン・ルーカ時代前期の6年間に限っては、《低迷期》（*gli anni difficili*）とか、《実験趣味と流行思想》（*sperimentalismo e moda culturale*）を追って、演劇改革の道から逸脱してしまった時代というレッテルが貼られ、この時期の作品は、個々の評価に多少の差異はあっても、押し並べて高い評価は得られず、むしろこの時期のゴルドーニの精神的苦闘を跡付けるための証拠資料としてのみ引用されることが多い。

なぜこのような結果になるのか？ 筆者はこのサン・ルーカ時代前期の作品をつぶさに検討してみた結果、確かにその後期の円熟した傑作群と比べると自然さや自由闊

達さの点では見劣りするが、その前のサンタンジェロ劇場時代の作品群と比べれば、扱っている内容やその話題性の点ではいささかも劣るものではなく、制作技法の点では確実に進歩していて、全体として作品の完成度は増しているように思われてならないのである。それゆえ、この時期の作品群に対する評価の低さは——もしかして、だが——これまでの研究者たちの何らかの偏見や、特定の価値観の押し付けから生じているのではなかろうか。そこで、その一例として、サン・ルーカ劇場に移籍した翌年（1754年）のカーニバルシーズンに上演されて大当たり（18晩のロングラン）を取った『イギリスの哲学者』を取り上げて、先ずこれまでの研究者たちの作品評価とその評価の根拠を明らかにしてみたい。ついで、この作品がゴルドーニ派とキアーリ派の激しい論争を引き起こす元になったジョルジョ・バッフォの批判詩と、それに対するゴルドーニ自身やゴルドーニ派の知識人たちの作品擁護詩を詳しく紹介して、この作品が当時のヴェネツィア社会にどのような話題性とインパクトを与えたのかを推し量り、この作品自体が持つ歴史的、文学的価値をより詳細かつ公正に評価するための糸口を提供したいと思う。

第1章 この作品のこれまでの評価とその問題点

このようなゴルドーニの作品評価の場合に、研究者が先ず参照しなければならないのは、20世紀半ばに記念碑的な『ゴルドーニ全集』14巻をたった1人で編んだ巨人、ジュゼッペ・オルトラーニの見解である。その彼は、この作品に《卓越した歴史的価値》は認めるが、《芸術的には全くの無価値》だと一刀両断にしている²⁾。彼の言う歴史的価値とは、この作品がバッフォの批判詩やガスパロ・ゴッツィの《賢明な擁護詩》などの賛否の大論争を巻き起こしたこと、当時流行した啓蒙主義などの外国哲学趣味を舞台に乗せたこと、18世紀のロンドンの街角を、ステレオタイプにはあるが、舞台に再現したこと、偽クエーカー教徒のパニックに人間平等論などの大胆な主張を語らせたこと、等である³⁾。しかし、芸術的観点から見ると、①すべての登場人物は《張り子の魂を持っていて、自分の情熱を空しくわれわれに訴えかけるばかりである。》②《この作品を気に入っていた作者自身や、18晩にわたって拍手をした観客

たちには、極めて教育的な内容の喜劇、それどころか英雄的な喜劇とさえ思われただろうが、その後直ちに忘れ去られ、そのおぞましい詩や人形のような登場人物が、19世紀の観客の前に再び姿を現すことがなかったのは当然である。》③《知識人たちには、ゴルドーニの喜劇改革の一步前進と映ただろうが、『ペルシアの花嫁』と同様に、書物でしか知らない外国の架空の人物を登場させ、彼の周囲で微笑みかけている現実世界から遠ざかってしまっている》、といった全面的な否定の言葉が連ねられている。

先ず①の、登場人物全員が《張り子の魂》(anime di cartapesta)を持っているという豪快な断定は、この作品の本質に対するオルトラニーの判断を示しているが、実は後で述べるジョルジョ・バッフォの、登場人物に《真実味がない》(no ghe xe verità)という批判と全く同じであることは興味深い。また②の、登場人物が魂のない人形になってしまったのは、教育宣伝的内容を持つせいであり、さらにライバル劇作家キアーリと対抗するために、ゴルドーニもマルテリアーノ詩という《おぞましい詩》(orribili versi)を採用して、彼の最も得意な散文、とりわけヴェネツィア方言による散文から離れてしまったからだ、と言う。また③の、《彼の周囲で微笑みかけている現実世界から遠ざかってしまった》という批判には、まさにこのヴェネツィアの《現実世界》に戻って、それを活写したサン・ルーカ時代後期の作品群を最も愛し、最も高く評価するオルトラニーの芸術観がはっきりと打ち出されている。

次に、最近の研究者たちの『イギリスの哲学者』の評価を見てみると、基本的にはこのオルトラニーの簡潔で明解な評価から一步も出ていないことが分かる。ただし、彼らがゴルドーニ研究にもたらした新味は、社会経済史的観点を持ち込んで、当時のヴェネツィア社会におけるゴルドーニの知識人としての役割や、彼の思想的メッセージを発信する相手である商人市民階級の置かれた状況を詳細に跡付け、その枠内でこの作品を理解しようと試みている点である。シーロ・フェローネによれば、オーストリア継承戦争の終結(1748年)による国際的な緊張緩和の影響を受けて、イタリアでも50年頃から平和の春風が吹き始め、それに乗って啓蒙主義思想が広まって行くが、まさにこの時期にヴェネツィアの急速な経済的衰退が始まる。その結果、《商人階層は、その社会的進出が決定的に阻害されて、自己の内に閉じ籠もり、貿易相手国の国

民の社会的、思想的経験を自分なりの仕方でたっぷりと吸収することができなくなった・・・その結果、啓蒙主義的な市民イデオロギーは、理論の点では表面的にもてはやされたが、ヴェネツィア商人階層は、このイデオロギーを社会的台頭のための具体的な行動計画へと変換することができなかった。この理論と実践のずれのために、《新しいイデー》は劇場にも反映しているが、同時にそれは、遠い異国の世界に投影されざるをえなかったのである。》⁴⁾ その典型例が、舞台をロンドンに移して、新しいイデーの体现者を主人公にした『イギリスの哲学者』である。

他方、マリオ・バラットは、当時のヴェネツィア社会における知識人としてのゴルドーニの役割に焦点を当てて、次のように述べている。《ゴルドーニが文化や科学の面でより自覚的なヨーロッパ知識人になればなるほど、彼の内ではイタリアとヨーロッパの文化的ずれの感覚が強くなっている。》⁵⁾ そこで彼は、最も先進的な啓蒙主義的テーマを、オペラの台本の中で、音楽に包み隠して提示するとともに、喜劇においては2つのタイプの作品群を生み出した。その1つは、《退廃する社会の広範な神経症》の徴候を示す人物たちを主人公にした作品シリーズであり、もう1つは、先進的な《ヨーロッパの市民階級をモデルにし、自分がそれに所属していることを自覚した人物》⁶⁾を主人公にした作品シリーズで、その代表作が『イギリスの哲学者』だ、というわけである。

以上の見解は、現在のゴルドーニ研究のほぼ定説となっている。しかもこの説は、今問題にしているサン・ルーカ時代前期の作品を評価するために利用されるだけでなく、とりわけその後期の《ヴェネツィア的世界》に回帰した傑作群を分析するための物差しとして大いに活用される。つまり、初期のサントンジェロ時代に登場したゴルドーニのパンタローネ像は、進取の気性に富む賢明で勇敢な商人であり、貴族階級の浪費振りを批判する健全なヴェネツィア商人階層を代表していたが、その後のヴェネツィア経済の急激な衰退とともに、この階層はその革新的な活力を失って保守化して行った。作者はその退行に歯止めを掛けるために、《サン・ルーカ時代前期の作品において、ヴェネツィア商人階層に《世俗的で、節度があって、社会に開かれた哲学》(una filosofia civile, discreta e sociabile)を提案したこともあった【=この提案というのは、今問題にしている『イギリスの哲学者』を指している】。だが、この階層は今や

ますます墮落して、いくつかの点で末期的な状態に陥ってしまった。》⁷⁾ その象徴が、後期の代表作である『田舎者たち』や『不平家のトデロさん』に見られる閉鎖的で頑固で偏屈な商人たちである。つまり、ゴルドーニのヴェネツィア時代の3つの時期に登場する人物たちは、ヴェネツィアの市民階級の興隆⇒挫折⇒衰退の軌跡を正確に写し出す鏡となっており、オルトラーニが最も高く評価する《ヴェネツィア的世界》を描いた後期の作品群は、確かに芸術的な傑作の名に恥じないとしても、同時に当時の市民階級の保守化と硬直化の様相を残酷に写し出す歴史的傑作ともなるわけである。そして、自分の期待していた階級の終焉を見届けたゴルドーニは、1762年にヴェネツィアを去って、パリに移住することになる……。

以上が最近の研究成果の要約であるが、これは当時のヴェネツィア社会の推移と、知識人ゴルドーニの人生の推移を統合的に捉えようとする見事なイデオロギー仮説である。この18世紀の進歩的知識人の思想的冒険の物語は、実に統合的で緻密で堅固な思想的構築物であるので、個々の部分では違和感をおぼえる研究者がいても、その全体像を打ち壊すことは難しいと認めざるをえない。だが、この定説に対してははっきりと異議を唱えた研究者もいる。それはジョルジョ・パドアン⁸⁾である。彼はサン・ルーカ時代後期の偏屈で滑稽な《田舎者》たちを、革新的市民階級が自閉症に陥ったことの象徴と解釈することに反発し、ゴルドーニが揶揄している《田舎者》というのは、前世紀後半に地方から首都ヴェネツィアに移住して来た新参者たちのことで、彼らの一族はヴェネツィアに住み慣れてからも、かつての田舎根性を失わず、首都の文化的生活に無関心だったことを笑いの種にしているのだ、と指摘した。《この田舎者たちは、伝統的に裕福な市民階級、つまり《資産家の家族》(famegie fondae) 出身でなく、田舎の卑しい生まれであって、彼らの現在の裕福さは、最近になって獲得されたものである……1630-31年の深刻なペスト禍によってヴェネツィアの人口が減少したために、17世紀後半の大量移民の波に乗って、テッラフェルマの貧しい田舎から首都に、新参者の家族が流れ込んで来た……この田舎出身の新しい市民層は、大規模な財政運用に従事していた最も裕福な企業家的市民を真似ようという誘惑にも、派手な浪費癖を持つ貴族を真似ようという誘惑にも陥らなかったが、同時に文化的発展に直接寄与しようとしなかったのである。》⁹⁾

このパドアンの歴史的考証に基づいた新説によって、これまでの定説は、その重要な一角である《田舎者》＝袋小路に陥ったブルジョワジョージ階級説を崩されて、大きく揺らいだように思う。だが、たとえ個々の部分についてどのような訂正が加えられたにせよ、堅固なイデオロギー構造を持つこの定説に取って代われるような、新たな統一的仮説はまだ見出せないことも事実である。そこで、現在取るべき研究方針としては、当時のヴェネツィアの日常世界の中で、彼の個々の作品が観客に与えた影響を詳細に検討することによって、この現実の小世界の枠内でその作品が持った意義を具体的に跡付けて、理解しようと試みることであり、この日常的な社会生活という次元と、ヨーロッパ思想界という大きい抽象的な次元とを安易に結び付けようとしないことである。

この点で『イギリスの哲学者』は、格好の題材を提供している。この作品のロングランによって、サン・ルーカ劇場を拠点とするゴルドーニの支持者たち、いわゆる《ゴルドニスタ》と、彼が去ったサンタンジェロ劇場で後釜に座ったピエトロ・キアーリの支持者たち、いわゆる《キアリスタ》の間で、この作品について大きな論争が巻き起こり、ヴェネツィアの知識人たちもその両派に分かれて、批判詩と擁護詩のビラによる宣伝合戦を繰り広げたからである。最初にこの作品を批判したのは、貴族で方言詩人のジョルジョ・バッフォであった。彼はヴェネツィア貴族の中産階級とも言うべき《クワランティア》（40人委員会）¹⁰⁾に属する司法官であるが、彼は『イギリスの哲学者』に対する批判詩を作者のゴルドーニにではなく、彼の若い同僚の貴族フェルディナンド・トデリーニに宛てて、劇作品と同じマルテリアーノ詩で書き（72行）、《礼賛派の首領を務めた君にはっきり言って置くが、わしはこの劇が気に入らなかったよ》¹¹⁾と宣言して、トデリーニに向かって公に反論するように求めたのである。同じ役所に勤める同僚に鋒先を向けること自体、両者の間で何らかの別の対立があったことを暗示するが、それはともかくとして、この批判に真っ先に反論したのは、作者のゴルドーニである。彼はバッフォと同じマルテリアーノ詩で答えたが（89行）、バッフォの詩の連押韻（rime baciata）だけでなく、行末の語をすべて同じ語で繰り返して反論するという見事な離れ業をやったのけている¹²⁾。その結果、バッフォの批判点とそれに対するゴルドーニの反論が正確に対照できるという利点が生じた。この応酬の後、

バッフォは再び70行のマルテリアーノ詩でゴルドーニに返事をしているが、その内容は再反論というよりは、ゴルドーニの『ペルシアの花嫁』の方を大いに称賛することによって、言外に休戦と和解を求めるような文面の詩であった。さらにゴルドーニ支持派の文学者ガスパロ・ゴッツィも、232行のマルテリアーノ詩で《賢明な擁護詩》を発表しており、以上の4篇の詩は、オルトラーニの『ゴルドーニ全集』の第13巻に収録されている¹³⁾。

しかしもちろん、ゴルドーニの作品に対する批判と擁護の詩は、これだけに留まらない。2000年に『イギリスの哲学者』の新しい校訂版を出したパオラ・ロマンは、その付録として前述の4篇の他に、グラネレスキ会員でサン・モイゼ教会の司祭であったマッテオ・フィエスコ師のマルテリアーノ詩による作品の擁護詩（105行）と、それに対するバッフォの反論詩（20行）、またゴルドーニの崇拜者だったフェルディナンド・デリ・オビッツィ侯爵のマルテリアーノ詩による擁護詩（118行）、そして最後に、バッフォが名指しで返答を迫った同僚、フェルディナンド・トデリーニ自身の擁護詩を収録している¹⁴⁾。これは散文の手紙序文の後に、やはりマルテリアーノ詩による《返答》という題を持つ擁護詩である。しかもこの572行という異常に長い《返答》は、それまでに発表されたさまざまな擁護詩をよく参照した上で、それらの集大成として作成されているので、時期的にはそれらの中で最も遅く書かれた最終的的回答といえることができる。以上の両者による批判・擁護詩の発掘と校訂によって、作者ゴルドーニを含めて、当時のヴェネツィアの知識人たちがこの作品をどのように解釈し、どのように評価していたのかということが、ある程度明らかにされるようになった。だが、その彼らの見解を紹介する前に、『イギリスの哲学者』がどのようなあらすじを持っており、どのような物語の類型に属しているのかについて、簡単に触れておかねばならない。

第2章 そのあらすじと物語の類型

ゴルドーニは1757年春、ピッテリ版喜劇集の第1巻に『イギリスの哲学者』を収録し、その献辞をイギリス総領事ジョセフ・スミスに宛てて、次のように述べている。

『イギリスの哲学者』は、私が喜劇で取り上げた中で最も大胆な主題を持っています。
[・・・・] 私は、この3、4年の間に【=出版年の3、4年前ということは、サン・ルーカ劇場に移籍した1753年か、この作品が上演された54年を指す】現われた数多くの劇作家たちの意見には賛成しかねます。つまり、彼らの何人かは、喜劇の主人公は常に悪徳漢か、欠陥人間か、狂信者でなければならず、その主人公が笑われたり、後悔したり、処罰されるようにすることが喜劇の第1の目的だと信じていますが、私はそうは思いません。私はこれまで何度も、高貴で有徳な登場人物と情念に基づいた喜劇を作り上げようと試みて、大変よい結果を収めたところか、それらは常に私の最も成功した喜劇となったからです。私は常に美德には悪徳を対置させて、それが処罰されるか後悔するようにし、こうして喜劇の最終目的から逸脱せずに、その主人公を愛する観客の心を満足させて来たのです¹⁵⁾。

有徳な人物を主人公にし、その人が悪徳漢や世間の無理解に苦しめられるが、ついにそれに打ち勝って大団円を迎えるという作品なら、ゴルドーニは『ヴェネツィアの弁護士』（1750年）をはじめとして、いくつか書いているが、その中でもこの『イギリスの哲学者』が《最も大胆な主題》を持っているというのは、どういう意味であろうか？ そのために、先ずこの作品の舞台とあらすじを簡単に紹介しておく。

この劇の舞台は、ロンドンの街角を模した固定舞台で、左右に喫茶店と本屋が並び、その2階はテラスの付いたサイクソン家となっている。物語は5幕に分かれているが、早朝から始まってその日の夕暮れまでの一日で終わるという、三一致の規則を守った、マルテリアーノ詩形による詩劇である。あらすじは以下の通り。主人公のヤコッベ・モンドウィルは、生まれは貧しいが、優れた哲学者としてロンドン貴族の間で尊敬されている。中でもミロード・ワンベルトは、彼と親しく付き合い、彼をよき助言者として厚遇するパトロンである。また、裕福な貴族の未亡人ブリンデ夫人は、哲学好きの若いインテリ女性で、彼を師として慕い、さまざまな科学や哲学に関する疑問を彼に尋ねている。しかし、この一見安定した上流階級と哲学者の関係は、突然壊れ始める。それは、ミロードがブリンデ夫人への恋心をヤコッベに打ち明けて、彼の忠告を求めた時からである。賢明なヤコッベは、世俗的なミロードと学究肌の夫人の性格が

合わないことを指摘して、結婚を思い留まるように助言し、ミロードに感謝される（1幕2場）。ところが、ヤコッベの名声を嫉む自称哲学者の2人のクエーカー教徒（金銀細工師のブルクと靴屋のパニック）が、ミロードの耳に疑惑の種を吹き込む。ヤコッベがミロードに結婚をやめるよう忠告をしたのは、実は彼自身がブリンデ夫人に恋しており、自分が彼女と結婚するためだ、と言うのである（1幕4場）。疑念に駆られたミロードは、ヤコッベに夫人と会わないように命じるが（2幕1場）、交際をやめたはずの彼が夫人と手紙のやり取りをしたことを知って（実は恋文でなく交際中断を告げる手紙であったが）、ヤコッベに対する疑惑は嫉妬と怒りに変わる。その後ヤコッベは、ミロードの怒りを宥めて関係修復するために、彼の前に跪いて謝罪し、これまでと同様にパトロンとして自分を受け入れてくれるように嘆願する（3幕11場）。すると今度は、ブリンデ夫人がヤコッベに会いに来て、万有引力に関する科学的な議論にかこつけて、暗に自分の密かな恋心を打ち明け、それに対してヤコッベは、その同じ議論を用いて、彼女の愛情に応えられないことを暗に伝える（3幕16場）。ちょうどその時ミロードから、路銀をやるからイギリスから出て行け、さもないと命は保証しない、という脅迫状が届くが、誇り高いヤコッベは即座にその命令を拒否してお金を突っ返す（3幕17場）。こうして、ついに両者は正面对決の場を迎える。ミロードは剣を抜いて彼を威嚇するが、武器を持たない哲学者は、捨て身の一喝と激しい叱責で相手の出鼻をくじく（4幕18場）。この2人の対決の場面がこの作品のクライマックスである。この後、ヤコッベを窮地から救い出し、ミロードとの関係を修復させるために行動するのは、ブリンデ夫人である。彼女は学問を口実に恋をする女哲学者から、愛するゆえに自己犠牲をする、勇気ある女性に変身し、ミロードに向かって、ヤコッベの命を救うためなら、自分の恋を諦めるし、ミロードが結婚を無理強いするならそれにも従うが、しかし結婚後に自害して自分の意思を貫く、と宣言する（5幕11場）。その間に、ヤコッベに対するミロードの怒りや嫉妬は全く根拠のないもので、そのすべての原因は、哲学者を貶めようとするクエーカー教徒たちの策略であったことが明らかになる（5幕17場）。こうしてミロードはヤコッベを許し、哲学者は名誉を回復されて幕引きとなる。

以上があらすじである。では、この物語はいったいどのような点で、ゴルドーニが

《喜劇で取り上げた中で最も大胆》な作品なのであろうか？ 実を言うと、心優しいゴルドーニは、さまざまな読者の立場や心情を慮って、はっきりと言わずに、曖昧にぼかして表現しているが、彼が本当に言いたかったのは、次のことだろうと思われる。先ずこの作品が、有徳者を主人公にした彼の他の喜劇グループと決定的に異なる点は、主人公が特権階級に属さず、むしろその特権階級に仕える卑しい階層出身であることである。しかも、この主人公は、特権階級の人々が持っていない美德や才能を持っていて、そのお陰で彼らに受け入れられ、尊敬されている。つまり、ヤコッベは支配階級の中に入り込んだ、尊敬すべき異分子なのである。

このような設定の場合、先ず観客や読者の心に浮かぶ率直な疑いは、この尊敬すべき異分子が、特権階級の人々をたらし込んで、その仲間入りを果たそうという密かな魂胆を持った狡賢い人間か、あるいは社会秩序を掻き乱して破壊してやろうという悪意を持った危険分子ではないか、という疑念であろう。このようなよそ者への警戒心と異物の排除という心理的メカニズムの上に築かれるのが、ゴルドーニが序文で触れた《喜劇の主人公は悪徳漢で、その主人公が処罰されるようにするのが喜劇の第1の目的》と考える喜劇作者たちの作品である。その典型的な例は、17世紀のモリエールの喜劇『タルチュフ』(1664年)である。敬虔な信心家を装ったタルチュフは、金満家のオルゴンをたらし込んで、彼の家の住み込み司祭となり、ついで彼の娘マリアーヌの夫に納まろうとするだけでなく、彼の妻エルミールにまで言い寄るのだが、最後に名うての詐欺師であったことがバレて処罰される。この有名な物語を下敷きにした作品はイタリアでも作られたが、18世紀のヴェネツィアでは、社会の世俗化が進んだことを反映して、住み込み司祭は家庭教師に、信心家は自由思想家に変えられている。たとえば作者不詳の『強い精神』(1772年出版)¹⁶⁾は、金満家で愚かなオッターヴィオと、その妹で未亡人のベアトリーチェの住む家が舞台で、虚栄心が強くて文学かぶれの未亡人ベアトリーチェは、フランス人フレロンの学識が大変気に入って、彼を家に住まわせて、家の娘ロザーウラの家庭教師にしてやると、フレロンは新思想や新知識でもって娘を誘惑して、彼女と結婚しようとするが、最後に彼は、《政治と宗教を批判する本》を出版した科で指名手配中の自由思想家、モモ・モデルネスキ(=「現代の誹謗家」)であることがバレて逮捕され、そのような男を信用した女たちの浅知恵が

嘲笑されて大団円を迎えるのである。

以上のことから、ゴルドーニが『イギリスの哲学者』を《喜劇で取り上げた中で最も大胆な主題》と呼んだ理由が、ある程度推測できよう。それは、タルチュフやフレロンの場合と同じ状況設定の中で、伝統的なアンチヒーロー像とは正反対の、理想的で模範的なヒーロー像を打ち立てようとする試みだからである。哲学かぶれの未亡人との関係について、人々が好奇の目で眺める中で、また自分の後ろ盾であるパトロンの不信と怒りと威嚇の中で、自分の身の潔白を抛り所に、常に正々堂々と振舞って、ついに自分のパトロンにかつての信頼と尊敬を取り戻させ、社会全体の称賛を勝ち得るようにすること、これがいかに大胆な企て、というよりいかに困難な企てであるかは、誰にでも理解されよう。そしてこのような場合、伝統的な保守派の観客は、この主人公をタルチュフ型のアンチヒーローとして、胡散臭い目で眺める傾向が強く、また《新しいイデー》に肩入れする観客は、このヒーロー像を称賛しながらも、主人公が本当に社会体制の破壊者でなく、社会のよき模範として行動し、その社会に受け入れられるものかどうかを、注意深く見守ったはずである。ではこれから、この作品に登場するヤコッベ、ブリンデ夫人、ミロード、クエーカー教徒の2人の偽哲学者について、各登場人物の性格をよく表わす場面を紹介し、この劇を見た当時の知識人や文学者たちが、それぞれの場面についてどのように批判し、どのように称賛したのかについて見て行きたい。ではまず、主人公のヤコッベ・モンドウィルから。

第3章 哲学者とパトロン

幕あき早々、喫茶店のボーイのジョアッキーノと本屋の店員ビローネは、この劇の主要テーマの1つである身分違いの交際、つまり庶民出身の哲学者ヤコッベと、貴族で哲学好きのブリンデ夫人の親密な関係について、世間の噂話を披露する。

ジョアッキーノ： でも噂では、君の言う博学な哲学者さんは、ブリンデ夫人から恋の深手を負ったということだぜ。

ビローネ： ブリンデ夫人はインテリの未亡人だが、その未亡人の方も、彼の美德に惚れ込

んでいらっしゃるという噂だよ。ある人は2人のことを嘲り、ある人は2人の関係を疑って陰口し、ある人は2人の熱心なお勉強から、何らかのご立派な成果が生まれるのを心待ちにしている。だが、ある人は2人を擁護し、ある人は2人が本と議論とで時を過ごすだけで満足していると言っているよ。

ジョアッキーノ： 彼女の妹さんのサイクソン夫人などは、若い未亡人である姉の浮気心を嘲っているよ…… [1幕1場]¹⁷⁾

女性に恋する哲学者、美德に恋する女性というのは、伝統的な言葉のニュアンスでは反意語どうしの結合であり、実に辛辣な皮肉の効果を上げている。だがヤコッベは、このような卑しい連中の卑しい噂話を完全に無視して、超然としている。彼はブリンデ夫人を尊敬しているが、愛してはいないと確信している。それゆえ、彼は噂を打ち消したり、言い訳をしたりする必要を微塵も感じないのである。確かに、ミロードがブリンデ夫人への愛を彼に打ち明けて、意見を求めた時、ヤコッベは両者の性格の違いを指摘して、結婚を思いとどまるよう忠告した。だがそれは、真に友人を思っていることであり、その証拠には、たとえミロードが彼女と結婚したとしても、自分は嫉妬の気持ちを全く感じないはずだからだ。自分が彼女に抱いているのは尊敬の念であって愛情ではない。確かに、彼女が自分に色々と援助してくれるのは、もしかしたら自分を密かに愛しているせいかもしれない。だが、自分はそれにつけ入って利益を得る(=未亡人と結婚して経済的安定を図る)ような卑しい男ではない。それゆえ、ヤコッベは逆に大っぴらにブリンデ夫人との交際を続けるのである。それと同時に、彼は《世俗的で、節度があって、社会に開かれた哲学》(una filosofia civile, discreta e sociabile)¹⁸⁾を、最初の独白の中で観客に披露する。

ヤコッベ：……夫人がミロードと結ばれたとしても、私にとってそれが何だというのだ？ 確かに私の心は彼女を尊敬しているが、ミロードのように愛してはいない。確かに彼女は親切に私を受け入れ、私を援助してくれる。だが私は、自分の利益を先に立てて、《廉恥心》(onestà)を後に回したことはない。私は貧乏人に生まれ、不運に虐げられて来たが、たとえすべての人に見捨てられたとしても、この私は常に同じ自分のままだ。だが、私はス

ストア主義者ではないから、この世の財産の完全な放棄を最高の美德と考えている者でもない。哲学から私が学んだこと、それはこの世とその財産が空しいものでないなら、それはわれわれ人間のためにあるということだ。富の享受はわれわれ人間の権利であり、食物の享受は人間の権利だ。人間の欲望が節度あるものである限り、すべての人にそれを享受する権利がある。だが、運命に虐げられ、罪もないのに苦しんでいる人は、その悲惨な状況にめげずに、泰然自若としているべきだ。もしその災いが運命から来るものなら、魂は傷付くことなく、心は汚れに染まることはないはずだからだ。人は災いを我慢する力を失った時にのみ、その罰が重過ぎると思い、その苦しみが「社会」悪から来ると感じるのだ。これが、私が哲学から学んだ最も重要な成果だ。私は物質的な快適さを嫌わず、世俗的な快楽を嫌悪しない。《私は生身の人間であることの重さを感じるし》(sento dell'uomo i pesi)、真面目な幸せを好んでいる。だが、逆境には屈することなく、心穏やかに耐え忍ぶのだ。[本屋の中に退場]

[1幕2場]¹⁹⁾

ここで彼は、ストア派の哲学との比較で、市民社会における新しい哲学のあり方を語っている。ストア派哲学は、社会内にありながら、この世とその富を軽蔑することを最高の美德と見なす反社会的な哲学である。この超越的で、反世俗的で、瞑想的で、孤独な哲学に彼が対置するのは、徹底して世俗的で、社会的で、行動的な哲学である。この世界とその富は空しいものでなく、軽蔑すべきものでもないし、人間が物質的な快適さを求め、世俗的な快楽を求め、真面目な幸せを求めるのは正当な権利である。それゆえ、その欲望が節度あるものである限り、すべての人間がその富を享受する権利がある。また、哲学者像も、それまでの孤高の有徳者のイメージとは大きく異なっている。民衆とかけ離れた、貴族的で、超人的な美德を誇示する英雄とか、超越的で、反世俗的で、社会を軽蔑する、瞑想的な英雄ではなく、他の市民たちと同様に、社会の中に生き、社会の中でのみ正当に評価される世俗の賢者であり、他人と同様に共同社会の問題について心を熱くする情熱を持ち、——ゴルドーニ自身の見事な表現を借りるなら——《生身の人間としての重さを感じる》哲学者である。

ところで、このヤコッベのストア派批判については、これが本当にストア哲学だけを標的にしているのかどうか、少々疑問がある。というのは、《この世の財産の完全

な放棄を最高の美德と考えている》のは、古代のストア派だけに限られず、当時もっと身近にあって、遥かに大きな思想的影響力を振るう勢力も存在したからである。それはローマ・カトリックの思想であり、現世と富の蔑視を説く、瞑想的で、非行動的な倫理観である。しかも当時のイタリア社会では、カトリックの教義や聖職者の批判は絶対のタブーであり、それを舞台に登場させることさえ許されていなかった。したがって、彼がストア派という名前でもって、暗に批判の鋒先を向けようとしたのは、むしろこの巨大で反世俗的な在俗勢力であったように思われるのであるが²⁰⁾、この問題については、クエーカー教徒の2人の偽哲学者について考察する際に、再び問題にしたい。

しかし、啓蒙主義思想を色濃く反映したヤコッベの思想は、前章で述べた『強い精神』のフレロンのように、《政治と宗教を批判する》危険思想になりかねない。というのは、《すべての人に社会の富を享受する権利がある》という彼の意見は、言外に、富が特定の階級に独占されている場合には、他の階級の人々はその再配分を要求する権利がある、という人間平等の主張を含んでいるからである。だがヤコッベは、この社会制度と衝突する直前で立ち止まり、その現実には異議を唱えずに、現実をそのまま現実として受け入れる。そして立ち止まった際に、彼が繰り返し客席に向かって述べるのは、この階級差別は社会《悪》でなく《運命》であるから、自分の不運を嘆いたりしないという決意である。《私は貧乏人に生まれ、不運に虐げられて来た。……だが、運命に虐げられ、罪もないのに苦しんでいる人は、その悲惨な状況にめげずに、泰然自若としているべきだ。……人は災いを我慢する力を失った時にのみ、その罰が重過ぎると思い、その苦しみが〔社会〕悪から来ると感じるのだ。》 反ストアで世俗主義の哲学者の、この奇妙にストイックな表明は、何を意味するのであろうか？ それは、ゴルドーニの知識人としての思想的な不徹底とか思想的怯懦ではないように思う。彼はサン・ルーカ劇場専属の劇作者であって、次章で述べる彼の批判者や擁護者たちのような知識人ではなかったからである。彼はヴェネツィアの観客たちのメンタリティーが受け入れることのできる、ぎりぎりのテーマを提出しているのであって、その後に生じる大きな波紋については、観客や知識人たちの自由な議論に任せているようである。ここにもゴルドーニの劇作品の社会に開かれた

性格を認めることができる。

しかし、社会身分による人間差別を認めることは、人間的美徳の点で貴族に負けな
いと自負する下位身分の者にとって、密かな屈辱と感じられるはずである。そのよう
な誇り高い人は、たとえアンシャンレジームの身分制度を受け入れて、目上の者に対
する敬語や礼儀を守っていても、その他の点では決して貴族に譲るまいとする密かな
意地を心に育んでいる。そして、その意地は、女性をめぐるライバル関係が生じる
ような場合に、自ずとあぶり出されて、はっきりと目に見えることになる。謙虚なヤ
コッベは、ブリンデ夫人に気のある素振りを見せたことがないと自負しているがゆえ
に、かえってミロードのしている前で、堂々と彼女と親密な会話を交わし、自分のパ
トロンのミロードが嫉妬と屈辱で熱くなる様を、冷淡な目で眺めるのである。

ブリンデ夫人：「ヤコッベに」ミロードは凶暴な目であなたを見ているわ。

ヤコッベ： 申し上げたでしょう、彼は恋しているのです。

ブリンデ夫人： 誰に？

ヤコッベ： あなたにですよ。

ブリンデ夫人： まあ、なんとありがたいこと！ きっと素晴らしい夫になるわね！

[・・・・・・・・]

ブリンデ夫人：「小声でヤコッベに」(何と言ってやったらいいの？ 教えてちょうだい。)

ヤコッベ：「小声でブリンデ夫人に」(熱を冷まして上げるべきでしょうね。)

ブリンデ夫人：「立ち上がる」ミロード、あなたの愛情は、私、本当に嬉しく思いますわ。
でも、はっきり言っておきますけど、私には再婚する気などありませんのよ。

[・・・・・・・・]

ミロード：・・・・僕の真心からの愛を意に介しないという本心をあなたから聞いて、僕は
赤恥を搔きました。あなたの軽蔑心はよく分かり、何がその原因かもよく分かりましたよ。
僕の貴族としての誇りは、このような侮辱を我慢できません。僕がこれまで黙っていたのは、
人間に対する遠慮の念からです。しかし、その謎が解けた今、僕も自分の憤懣をぶちまける
ことを誓いますよ。僕はあなたに向かって話しているわけではありません。僕は女性に腹を立
てたりしませんから。だが、裏切り者、恥知らずは、この僕の権力を恐れるがいい。[退場]

ブリンデ夫人：[ヤコッベに] 聞いた？

ヤコッベ： 奥様、食事にお行きなさい。

ブリンデ夫人： ああ、ヤコッベ、もしかしてあなたの身に……

ヤコッベ： 私のことなら心配しないで。《事の真相》(il vero) と《身の潔白》(l'innocenza) はいつも私を守ってくれる楯でした。奥様、食事にお行きなさい。私もそうしますから。[退場] [2幕9場－10場]²¹⁾

ヤコッベは、《事の真相》と《身の潔白》が自分の名誉を守ってくれる楯であったと、自信を持って断言している。この彼の自信の中には、密かなライバルへの挑戦心が見え隠れしている。この種の無意識の自己顕示欲は、実はどれほど謙虚な人や争いを嫌う人の心にも生じる性質のものであり、たとえば女性をめぐる密かな意地の張り合いなどは、たとえ現世の欲を完全に絶ったはずの聖職者であっても、完全に免れていると言いがたいのである。それゆえ、ましてや世俗の哲学者であるヤコッベの密かなライバル心を、ここで批判するのは、少々酷なことではなかろうか。

だが、問題はその次である。それでは、この《事の真相》と《身の潔白》の確信さえあれば、人にどのように中傷されようと、世間の噂は一切無視して、その誤解を解く努力をしなくてよいのであろうか？ 実はここで、ヤコッベとその他の哲学者たちの間に、大きな態度の違いが生じる。聖職者やストア主義者の場合は、絶対的な真実と自分の良心の潔白さえ確認できれば、それで十分であり、世間に向かって言い訳する必要は基本的にない。たとえ誤解によって社会全体から指弾を受けたとしても、彼らは社会を超越した原理——神やロゴス——に依拠して生きているのであるから、その原理によって守られていると感じ、それゆえ、俗人の無理解や中傷の中でも超然として生きていられるのである。ところが、世俗主義を信奉する哲学者には、このような超越的な拠り所は存在しない。彼はこの社会の中で生き、この社会の正義に照らして評価される。それゆえ、彼は《事の真相》と《身の潔白》を確信しているだけでは、自分の世俗的な名誉を守ることができない。彼は世間に対して積極的にその真相を説明し、自分の無実を説いて、世間の誤解を解き、人々に納得してもらう必要があるのだ。しかし、世間には敵対者や中傷を好む人が多くて、説得を受け付けられない場合

も多い。このような社会正義が根付いていない世界では、どうしたらよいのか？ そのような場合でも、社会の支配階級の中には美德を好む立派な人士が必ずいるはずであるから、その人を庇護者として頼り、そのパトロンの信用を得ていれば、傷つくことはない。この社会的強者が、数多くの心ない誹謗者たちから彼を守ってくれるはずだからである。ゴルドーニだけでなく、近代以前の——いや、近代以後でもそうだが——社会的弱者である数多くの文人が、自分の著作を出版する際に、それを決まって当時の社会の権力者に献呈して、そのパトロンを称賛する献辞を書いているのは、まさにこのためである。

しかし、この支配階級のパトロンを怒らせてしまい、彼の庇護を受けられなくなったなら、その時、哲学者はどうなるのであろうか？ 後ろ盾を失った者は、無慈悲な俗人の嘲笑と軽蔑に曝される。世俗の哲学者たち、とりわけ資産家や貴族の出身でない貧しい哲学者たちは、バッフォが嘲笑して述べているように、《学者のふりをして、謝礼を貰いにあちこちの家に出入りする家庭教師》として生きて行かねばならなかった。だから、もしパトロンに見捨てられたなら、自分の名誉や誇りだけでなく、たちまち生活の糧を失って、困窮してしまうはずである。だから、われらの誇り高い哲学者、ヤコッベ・モンドウィルでさえも、ミロードの前に跪いて、自分の非礼を詫び、再び自分のパトロンになってくれるように懇願せざるをえないのである。次の場面では、ヤコッベの貴族階級に対する、先ほどの意地と誇りは見る影もなく消え失せている。

ヤコッベ：……確かに私は貧乏人ですが、世間に名前を知られた人間です。あなたから蒙る罰で、私が恐れるのは、禍々しくもあなたの恩恵を召し上げられてしまうことです。私は自分の名誉だけを大切に守り、誠実な民衆を愛し、貴族の人を尊敬して来た人間ですが、貴族の人に軽蔑され、疑いの目で見られることは、矢で心臓を射貫かれるような苦しみです。私は貧しい生まれで、額に汗して生活して来ました。私の日々のパンに味覚を添えてくれるのは、貴族の人の恩恵と愛顧です。あなたは賢明で誠実なお方なのに（だから私は当惑しているのですが）、もしそのようなあなたが私を見捨てるならば、世間の人は私のことを何と言うでしょう？ あなたは、ないことをあると仰るような人ではありませんが、私の敵ども

が私の噂話を触れ回るのを聞かれることでしょう。ですから、あなたは私から庇護を召し上げるだけで、私を破滅させることができるのです。さあ、私はあなたの前で、このように、あなたの足元にひれ伏します……私は自分が無実だから、不当な仕打ちを受けたなどと、大胆にあなたを非難しようとは思いません。お殿様、どうか私を信じて下さい。あなたは外見に騙されていらっしゃるのです。私は無実であるか、あるいは少なくとも罪があるとは思えません。たとえ私に罪があったとしても、私はすでに辛い罰を受けました。私は寛大なあなた様に憐れみを恵んで頂きたいのです。私がこのようなことをお願いするのは、決して卑しい怯えからではありません。私には真心から庇護して下さる人が絶対に必要だからです。

ミロード： ヤコッベ、お前は僕の人柄をよく知っているはずだ。僕は人でなしではない。騎士の心に訴えたお前の願いを聞き届けてやろう。お前は自分の義務を守り、僕に対して尊敬の念を失うな。そうすれば、お前を再び僕の恩恵に浴させてやると約束しよう。[3幕11場]²²⁾

これがアンシャンレジーム期の、貧しい哲学者と貴族のパトロンの現実の関係であった。この痛ましいシーンを前にして、キアリスタとゴールドニスタの間では、ヤコッベの行動の是非をめぐる激しい論争が勃発する。この論争に最初に火をつけたのは、ヴェネツィア共和国のクワランティアの司法官、ジョルジョ・バッフォであり、彼が論争相手として名指ししたのは、同じ法務局の若い司法官フェルディナンド・トデリーニであった。したがって、この論争は最初からヴェネツィア共和国の裁判官たち、つまりヴェネツィア社会のお目付け役たちを巻き込んだ正式の公開論争だったのである。ではこれから、その主だった批判者と擁護者たちの論点と見解を紹介しながら、ゴールドーニの哲学者がどのように受け取られたのかを見て行くことにしよう。

第4章 ヤコッベをめぐるバッフォの批判とゴールドーニの返答

ジョルジョ・バッフォ²³⁾は、ヴェネツィアの中流貴族の定職であるクワランティアの司法官を務め、何の目立った業績も残さずに一生を終えた凡庸な役人であったが、その一方で、ヴェネツィア方言でエロティックな詩を作っては、それを巷で流布させ

る、非凡な詩人という全く別の顔を持っていた。生前の彼は、自分の詩の出版を固く拒んでいたが、すでに生前から巷では密かに背徳的な詩人という噂が立っていた。彼は複雑な性格の持ち主で、宗教に強い反感を持ち、エルヴェシウスの極端な感覚論に賛同し、《性の引力こそ、人間社会を作り出す第一の動因である》と考えるリベルタンであった。彼のように、情念や性の力を人間の行動原理と見なす者にとって、ヤコッペのように世俗的快楽や富の享受を認めながらも、秩序紊乱の力を秘めた性の前では、極めてストイックな態度を取る哲学者に対しては、偽善的で真実味のない登場人物として、強い反感を抱いたであろうことはよく理解できる。彼の具体的な不満は2つあった。その第1は、ヤコッペが自分の哲学を際立たせるような波乱万丈の人生を見せてくれないこと、第2は、哲学者も内心では異性が好きなのに、表面では無関心を装っている人のように、つまりは偽善者のように振る舞っていることである。

ここには派手なドラマ展開はないし、学ぶべきものもない。だが、何にもましてわしを不快にさせたのは、登場人物たちに真実味がないことだよ。イギリスの哲学者を舞台に登場させるという触れ込みだったが、実際には大した哲学者とは思われない。彼はどのような、哲学者にふさわしい行為をしている？ 正直言って、わしは彼の哲学を際立たせるような何かを期待していたのだがね。ところが逆に、《彼が抑圧している》(l'abbia rafrenà) ように見えるのは、いったい何の情念かね？ なぜ彼は結婚しない？ 女に惚れたことがなかったからだ。しかし、彼はキケロのような口振りで話しながら、落ち着きを失って、非常に動揺しているように見えるがね。彼は卑下しているように見えるし、詫びているようにも見えるが、許しを請うのは、自分が過ちを犯したと告白しているのと同じこと。この男は哲学者というよりも、むしろ偉い学者のふりをして、謝礼を貰いにあちこちの家に出入りする、家庭教師の先生というべきだ²⁴⁾。

このバッフォの皮肉な物言いは、悪意に満ちている。引用文中の4個の動詞《見える》(se vede, mi vedo) は、バッフォの個人的な印象であること、したがって客観的な事実でない可能性もあることを、用心深く先に断っている個所である。その彼の印象では、哲学者は愛情を抑圧して、キケロのように立派に振舞っているようだが、内

心では非常な動揺を見せており、その証拠には、パトロンの前で自分の恋の過ちを認めて、許しを請うているではないか、というわけである。それゆえ、ヤコッベは哲学者というよりも、《謝礼を貰いにあちこちの家に出入りする家庭教師》、つまり、聖人のふりをしながら、実は恋に狂うタルチュフと同じ穴のムジナだ、ということになる。

ここで興味深いのは、バッフォが《抑圧》という言葉、真の意味での情念の抑圧でなく、情念の《隠蔽》という意味で使っていることである。もしこれが本当に情念の抑圧であったならば——ゴールドーニの哲学者の場合は、まさにそうなのであるが——バッフォは自分の哲学的信念から言って、哲学者の態度にもっと正当に反論することができたのではあるまいか。というのは、バッフォ自身の信条によれば、情念は理性よりも心の深い所にある、極めて強力な動因であるから、人が情念を抑圧してそれを押し殺してしまうのは、美德の行為ではなく、逆に偽善的で非人間的な行為だ、と主張することができたはずだからである。しかし、彼はそうせずに、ヤコッベを自分の卑しい情念を隠蔽する偽善者と見なし、パトロンの貴族の怒りに遭ってたちまち動転し、自分の過ちを認めて謝罪した、というように解釈したのである。

これが意図的な曲解であることは、明らかである。実際、ヤコッベがミロードの足元にひれ伏して謝罪したのは、自分の罪を認めたからではない。ミロードの怒りを宥めて、再びパatronを引き受けてもらうために、《事の真相》と《身の潔白》は一時的に棚上げにしたにすぎないのである。また、ヤコッベがブリンデ夫人に恋心を抱いていないことは、1幕2場の独白：《確かに私の心は彼女を尊敬しているが、ミロードのように愛してはいない》からも明らかである（この時代の独白は、観客に向かって登場人物の内心を打ち明けるものとして、言葉通りに受け取らなければならない）。さらに同じ1幕14場でも、ヤコッベは、哲学者の妻帯についての、人口に膾炙した教訓話を用いて、自分自身の情念の抑圧と独身生活の選択を正当化しようとしている。

ヤコッベ： もし夫人が私のことを指して「愛していると」言っているなら、彼女は大変な思い違いをしている。この私が自由を失うって？ いや、それだけは絶対にありえない。私は夫人の美德を高く買っているし、彼女の美しさも好きだ。だが、私にとってもっと大切な

のは、自分の心の平安だ。女性の欲求がどれほど節度あるものでも、学者にとって妻は常に煩わしいものなのだ。(1幕14場)²⁵⁾

ところで、バッフォの哲学者批判に真っ先に反論して、この基本的な誤解を正そうとしたのは、作者のゴルドーニであった。彼はヤコッベが情愛をたえず抑圧して来た人間であることは率直に認めるが、ミロードに頭を下げたのは、《卑しい過ち》を謝罪するためでなく、パトロンの庇護を得るためである、と正当に反論している。

彼はたえず情愛を抑圧して来た人で、いまだかつて女性に恋したのを見たことがない。もちろん彼だって、心を熱くすることはあるが、それは正当な動機がある時で、しかも軽薄な人のようにではなく、キケロのように振る舞うのだ。彼は《卑しい過ち》(viltà)を犯していないから、許しを請うてもいない。この場面は誤解されているので、批判を浴びているのだ。偉い学者のように謝礼を突っ返せと教える人が、どうして家庭教師のように謝礼を受け取ることができる？²⁶⁾

ここで2人の間で行われている密かな綱引きは、ヤコッベを哲学者のふりをした卑しい偽善者と見るか、それとも新しい社会の問題に《心を熱くする》高貴な哲学者として見るかという、本論の副題として示した問題である。バッフォは彼を伝統的なタルチュフ型の人物として皮肉に眺めようとし、ゴルドーニは、新しいイデーを持った、新しい世俗社会の模範となる哲学者として称賛しようとした。この2人の応酬に続いて、さまざまなヴェネツィアの知識人がこの論争に参加して、ヤコッベの態度についてさまざまに意見を表明しているので、次の章では3人の擁護者たちの見解を取り上げて、それぞれがバッフォに対して、どのような立場からどのように反論しているのかを見てみることにしよう。

第5章 ヤコッベ支持者たちの立場と論拠

マッテオ・フィエスコ(あるいはフィエッコ)師²⁷⁾については、サン・モイゼ教会

の司祭で、ゴッツィ兄弟と同じグラネレスキ会員であったこと以外、まだ分かっていない。この聖職者は、相手を居丈高に決めつけて愚弄するという、聖職者にあるまじき粗暴な品性を持つ詩人であるが、その考え方自体は極めてキリスト教的であり、聖職者的である。

情愛を理性の下に従属させる人が哲学者でないとすれば、いったい何者かね？ 道化師かい？ この世の真理と正義を愛し、不運に見舞われても、心安らかにそれを耐え忍ぶ人、あらゆる機会を捉えては自分の身分を高めようとせず、黄金の輝きに目が眩んだりしない人、自分の心が無実だと信じているゆえに、侮辱や脅しに腹を立てない人は？ もしこの批判者が彼の内に哲学や倫理的原則を認めないとすれば、それはそいつが、哲学とは何であるかを知らないからだ²⁸⁾。

ここでフィエスコ師が述べている哲学者像や理性は、次で述べるオビッツィ侯爵の啓蒙主義的な哲学者像や理性とは、かなりニュアンスが異なっているので、注意を要する。フィエスコ師が、《哲学者とは、情愛を理性の下に従属させる人である》と言う時、彼は明らかにキリスト教的な哲学者像を思い浮かべているのである²⁹⁾。キリスト教神学によれば、人類の父祖アダムは、現在の人類が持つすべての自然の能力に加えて、神から超自然の恵みを授けられていた。そのために、アダムの意志は常にまっすぐで正しかった。というのは、彼の理性は、神の命令にまっすぐに従い、彼の肉体も理性の命令にまっすぐに従って、いささかも逸脱したり反逆することがなかったからである。これを一般に《原義》の状態とか《聖化の恵み》の状態という。しかし、アダムとエヴァが神の怒りに触れて樂園から追放された時、神は人間を創造した時に与えた自然の能力（= *imago Dei*）は、そのまま残してやったが、それまで神の特別の計らいで与えていた超自然の恵み（= *similitudo Dei*）の方は、人間から取り上げてしまった。その結果、人間の意志は極端に弱まって、肉体は情欲に走って理性に反逆し、悪に染まって善を求めず、自分の利益ばかり追い求めて、他人のことを省みなくなってしまったのである。だが、人間は神に深く帰依することによって、再び自分の上に神の超自然の恵みが射し込み、神と直結した正しい状態（= 原義の状態）に戻るこ

ができる。それゆえ、フィエスコ師の思い描く哲学者とは、神の超自然の恵みを前提にして、理性の命令に情愛を完全に従属させるような哲学者、いわばキリスト教の聖職者のような人間なのである。

彼のヤコッベ賛美も、極めてキリスト教的な観点からなされているようである。不運を心安らかに耐え忍び、この世のはかない幸せ（＝権力や財力）を求めず、侮辱や脅しに腹を立てないというのは、むしろキリスト教的な徳目と言った方がいいのではないか？ ここでは、ヤコッベの提唱する《世俗的で、節度があって、社会に開かれた哲学》という面が、すっかり抜け落ちているのである。また、ヤコッベがミロードの足元にひれ伏す、問題の場面についてのフィエスコ師の見解も、極めてキリスト教的である。

かわいそうに、哲学者は騎士の足元にひれ伏したことで、卑屈だと責められている。この批判に対して私は答えよう。この卑下する行為は、謙虚さである以前に、《この世で見出しうる最高の美德》（la virtù più bella che si ritrovi al mondo）なのであると。それに最後までよくよく考えてから、非難すべきだ。……もし彼が儂い幸せやお金のためにそのようにしたとすれば、もちろんその行為は哲学者にふさわしくなかった。だが、自分の名声と名誉を守るために、《貴族のパトロン》（nobil protettore）にへりくだって恩恵を求めているのであれば、厚顔な批判者が、皮肉な調子で根拠もなく、彼を卑しい精神の持ち主だ、などと呼んでいいものだろうか？³⁰⁾

フィエスコ師は、哲学者が騎士の足元にひれ伏して懇願したことを、たんなる謙讓の美德でなく、《この世で見出しうる最高の美德》と称賛しているが、この《最高の美德》とはいったい何を指すのであろうか？ それを窺う鍵となるのは、《nobil protettore》が指し示すものである。引用文では、前後の文脈から《貴族のパトロン》と訳したが、実はこの語は《高貴な庇護者》という意味であり、神をも指すことができるのである。それゆえ、神にへりくだって慈悲を求めるのが《最高の美德》であるように、貴族のパトロンにへりくだってお慈悲を求めるのは、卑屈とは正反対の高貴な行為だという主張になる。ここには、貴族と哲学者の世俗的關係を、神と人間の神

学的関係に喩える社会階級観と、最も卑屈に見える行為が実は最高の美德の発揮であるというキリスト教的逆説がある。《だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる》（マタイ23・12）のである。そして、このフィエスコ師のへりくだりを礼賛する物言いの中に、へりくだりを旨とする聖職者の、俗人に対する密かな高慢さが見られることは、言うまでもないだろう。

このフィエスコ師と好一対をなすのは、フェルディナンド・デリ・オビッツィ侯爵³¹⁾のバッフォ批判である。彼はゴルドーニの喜劇の熱烈な支持者で、自分でもアマチュアの劇作家として活躍したパドヴァ貴族であるが、彼の見解は、さまざまな論客たちの中で最も啓蒙主義的である。

教えてくれ、哲学者とは、どのような人を指して言っているのか？ 《道德哲学を説く有徳者》（il virtuoso che professi moral filosofia）のことか？ [パトロンの] 恩恵や厚意を軽蔑し、社会を無視し、友人を持たない人のことか？ 常に誠実な手段で得られる富や財産を毛嫌いして憎む人のことか？ ……哲学者は、ミロードが親切で賢明な時には、彼を尊敬して敬意を払うが、彼が逆上した時には、勇気を持って彼を叱りつける。卑屈になったり、へつらったりせずに彼を尊敬し、叱る時にも節度を忘れない。彼はいかなる武器にもまして強力な理性をもってそうするのだ³²⁾。

オビッツィ侯爵が古い哲学者のイメージの否定法によって描く、新しい哲学者像、それは次のようなものである。彼は社会から孤立した美德の持ち主でなく、社会に生き、社会の中で友人関係を作り、支配階級のパトロンと主従関係（＝《恩恵や厚意》を授受する関係）を結び、誠実な手段で得られる富（＝商業活動による富）を肯定する、まさに世俗の哲学者である。そして、その反対に否定すべき哲学者とは、世俗世界に生きていながら、社会を無視し、その中でパトロンとの主従関係を結ばず、超越的な存在に帰依して、道德哲学を説く《有徳者》である。この有徳者の像は、もちろん古代のストア主義者にも当てはまるが、同時に当時のカトリックの聖職者にも過不足なく当てはまる。

オビッツィ侯爵によれば、この新しい哲学者が持つ最大の武器は理性であるが、こ

れは先ほど述べたキリスト教的な理性とはかなり異なったニュアンスを持っているので、注意しなければならない。キリスト教的な理性とは、神の超自然の恵みを受けて、情念を完全に従属させてしまうような理性、いわば肉体と心の絶対的支配者であり、絶対君主としての理性であった。それに対して、啓蒙主義者たちの理性は、神から追放された人間に残る、自然の能力（= imago Dei）としての理性のことを指している。キリスト教の思想家たちは、これを極めて脆弱で、常に過ちに陥りがちな能力として悲観的に見ていたが、オビッツィ侯爵をはじめとする啓蒙主義者たちは、この人間生得の理性を《いかなる武器にもまして強力なもの》として、全面的な信頼を寄せている。この神から自立した人間が持つ、神から自立した理性は、神を瞑想するためでなく、人間がさまざまな世俗的問題を《合理的》に解決するために用いられるが、とりわけここでは、パトロンとの人間関係を調整して解決する能力として称賛されている（パトロンが賢明であれば尊敬するが、尊敬してもへつらわず、パトロンが逆上すれば叱りつけるが、叱っても節度を忘れない）。しかし、この理性礼賛は、貴族出身の哲学者ならいざ知らず、卑しい階級出身の哲学者の場合には、少し用心して眺めなければならない。ヤコッベがミロードを叱りつける時には、もちろん彼は理性に則っているであろうが、この行為は、社会的に見れば、卑しい身分の者が貴族を叱りつけることであり、たとえそれが理にかなった行為だとしても、貴族の名誉を傷つけることは間違いないからである。この問題については、ミロードを考察する時に再び取り上げることにする。

この保守派と革新派の知識人のヤコッベ擁護論に続いて、3番目に登場するのは、ガスパロ・ゴッツィ³³⁾の《賢明な擁護詩》（オルトラニーの言葉）である。彼は前の2人と違って思想的な観点からでなく、いわば人間的な観点から、深い同情をもって主人公を考察している。実はガスパロ自身も、イギリスの哲学者と同じように辛苦の人生を送った文学者であった。彼は零落したヴェネツィア貴族の家に生まれ、市民階級出身の女流詩人、ルイーザ・ベルガッリと結婚したために、貴族の称号を剥奪され、古典ラテン語やフランス語の本を翻訳して出版したり、さまざまな雑誌の編集や記事の執筆をしたり、大貴族マルコ・フォスカリーニの秘書になったりするが、このパト

ロンとも仲違いしてしまうなど、一生涯の間、経済的な困窮に付きまとい続けた。それゆえ、彼のヤコッベに対する態度には、彼自身の辛い体験に裏打ちされた、深い人間的な共感が溢れており、その擁護詩が持つ悲哀の調子は感動的でさえある。

登場人物は魅力的で、作者は彼を真の学問の成果を世間に教える人物として描いている。作者は、彼が哲学者であるのは、結婚したことがなく、そのような気紛れを起こしたこともないからだ、と主張しているのではないよ。人々の目に彼が哲学者と映るのは、彼が自分の身のほどを弁えており、自惚れをひけらかさないからだ。彼が過ちを犯したと責められた時、その言い訳をしながら、お慈悲を求めるかのように許しを請うからといって、このことで彼に嫌疑をかけないでほしい。彼は自分が完全に無実だと知っているが、同時に貧乏人は、権力者や金持ちとはたえず丁重に付き合わねばならないことも知っている《苦労人》（omo d'esprienza）なのだ。彼は天が自分に定めた身分に留まることを知り、《社会秩序》（patti della società）を乱さずに生きている。実はこのことは、大きな教訓なのだ。というのは、100人いればその99人までが、この教訓を学ぶ必要があるからだ。残念ながらこの世界では、ちょっとしたラテン語の規則を知っているだけで、大物のように威張って大言壮語し、自分がすべての人間の頂点にいるかのように思い込み、貴族も血統も何も評価しない。イギリスの哲学者は、その謙虚な話し方によって、そのようなわれわれを矯正するのに十分なことを教えてくれたのだ³⁴⁾。

彼はバッフォのように、誇り高い哲学者がパトロンのへりくだるのは卑屈な行為だと貶したりせず、またフィエスコ師のように、へりくだりは逆に最高の美德の発露だと持ち上げたりもしない。へりくだりは確かに卑しい行為ではあるが、現実の社会においては、そうせざるを得ないこともままあるのだ。たとえ自分に理がある場合でも、その理を押し通せばパトロンの庇護を失う時には、自分の理よりもパトロンの意向を先に立てて、彼の好意と庇護を確保しなければならない。ゴッツィの見事に核心を突いた表現によれば、《貧乏人たちは、権力者や金持ちとはたえず丁重に付き合わねばならない》のであり、ヤコッベは、このような社会の中で身を立てて来た《苦労人》なのである。ヤコッベのさまざまな擁護者の中では、ガスパロ・ゴッツィだけが、は

っきりと当時のヴェネツィア社会が孕む矛盾と階級差別の問題に言及し、この彼だけが、ヤコッペの直面している真の人間的問題を深く理解しているようである。

また、ヤコッペが哲学者である根拠は、彼が結婚しようという気紛れを起こさないことにあるのではない。これは、ゴルドーニの少々ステレオタイプな、結婚を敬遠する哲学者像に対する、ゴッツィのユーモアを込めた批判であり、哲学者と結婚が相容れないものでない、という彼の意見表明である。ところで、ゴッツィが指摘する哲学者の真の教訓とは、《天が定めた身分に留まることを知り、社会秩序を乱さずに生きる》ことである。彼によれば、社会の99%の人が《身のほど》を弁えず、《自惚れ》に駆られて、階級の違いを尊重せず、互いに軽蔑し合い、罵り合って生きている。(ゴッツィは、直接的には《威張って大言壮語し》《貴族も血統も何も評価しない》クエーカー教徒の偽哲学者たちを批判しているのだが、実はこれは彼一流の韜晦であって、本当は貴族に対する下層階級の無礼、さらにそれ以上に貴族階級の下層階級に対する傲慢さを暗に批判しているのである。この後者については、口に出すことが許されなかった。) ゴッツィは、このような階級間の意地の張り合いに対して警鐘を鳴らし、すべての階級の人々に自重と、相互の尊重を呼びかけ、その模範としてヤコッペの生き方を示したのである。しかし同時に、《世俗的》(civile)で、《社会に開かれ》(sociabile)ながら、しかも《社会秩序を乱さない》(nol turba i patti della società)ような生き方、これがいかに困難なもので、その当人にいかに大きな犠牲を強いるものであるかについても、ゴッツィはよく知っていたのであり、彼がヤコッペに深い同情と憐れみを抱くのも、まさにその犠牲の大きさを知るゆえなのである。

第6章 フェルディナンド・トデリーニの反論

ガスパロ・ゴッツィの視点が、主人公の内面に入り込んで、その内部から彼と社会との関係を眺めるものであったのに対し、クワランティニアの司法官、フェルディナンド・トデリーニ³⁵⁾は、ヴェネツィア社会の動向を監視し、もし必要なら直接介入できる司法官という社会的な立場から、この喜劇とそれをめぐる論争を眺めている。この世間を騒がせた論争の火付け役となったのは、同僚の先輩で、風紀紊乱者の噂のある

ジョルジョ・バッフォ（60歳）であり、しかも、彼は作者のゴルドーニでなく、ゴルドーニ支持派の首領と目された若いトデリーニ（27歳）を名指しして、自分の批判に答えるようにと挑戦して来たのである。この論争は、ヴェネツィア共和国の指導者階級から端を発したものであるゆえに、トデリーニの反論は、彼の立場上、これからのヴェネツィア社会を監督する司法官にふさわしい、模範的なものでなければならなかったはずである。

先ずバッフォが、自分の大好きな『ペルシアの花嫁』の登場人物のように、観客の空想力を刺激するような派手な言動³⁶⁾を、この哲学者は見せてくれないという不満を述べたのに対して、トデリーニは次のように返答する。

君の空想力は、彼の哲学を際立たせるために、いったい何を期待していたのかね？ たった1日の内に彼が祖国と自由と命を失うという残酷な試練にさらされることかね？ この3つの試練は荒々しい力で彼の堅忍不拔の心に襲いかかって、その賢明さを失わせる可能性があった。そして彼は、この3つの試練をすべて無事に切り抜けたのだから、節度ある心の持ち主なら、それだけでもう満足すべきではないか？ それとも君は、彼の悲劇を見たいのかね？ 君は彼に何をさせたいと思っているんだ？ 奇跡を起こすことか？ 哲学については、とても口に出して言えないような思想を語れと？ 生き方については、とても信じられないような波乱万丈の人生を送れと？ 世間全体に刃向かい、ありとあらゆる不幸の中にあって、彼の美德が卑しくならず、誇りを持ち続けることかね？ もしそのような人物なら、彼を弁護することが困難になるだろう。君だってこれまでの意見を変えて、笑いながら言うだろうよ、これではやり過ぎだってね。それに、台本に無理のある喜劇を見た観客は、驚嘆はしても、何の教訓も得られずに帰る。舞台は模倣可能な美德を提供すべきであって、人を驚嘆させるが、到達が不可能な美德では駄目なのだ。ヒロイズムがあまりに高い所にあると、知性は楽しんでも、意志は絶望するものだからね³⁷⁾。

ここでは、ヴェネツィア社会のお目付け役であるトデリーニの演劇観が表明されている。バッフォの好む人を驚嘆させるような出来事、つまり、奇跡を起こしたり、奇矯な思想を語ったり、波乱万丈の生涯を送るような哲学者では、その人物像に真実味

がなくなってしまう。だから《舞台は模倣可能な美德を提供すべき》なのである。彼にとって劇場とは、観客を驚嘆すべき夢の世界に誘うエンターテインメントの施設ではなく、観客が市民生活を送る上で、自分の模範となるような人物像を提供する、教育的な場所なのであり、ゴルドーニの『イギリスの哲学者』は、まさにそのお眼鏡にかなった作品だったのである。そして、ヤコッペの処世術が市民生活の模範となる理由について、トデリーニは次のように語っている。

われらのイギリスの哲学者の哲学は、《敬虔》（pia）で、《純》（pura）で、《心に疚しさのない》（serena）哲学だ。彼は自分の名声を大切にし、真面目な快楽を愛し、誠実な女性と付き合い、騎士階級を尊敬する。人間社会を軽蔑して逃避するという虚栄心を、自分の栄光とは思わない。貧しい生まれで、貧乏に苦しめられていても、運命に対しては常に泰然自若としている。……自然から恵まれたものの中でも、とりわけ自由を大切にし、結婚の重荷から救われることを求める³⁸⁾。

トデリーニの解釈によれば、ヤコッペの内に見られる《敬虔な哲学》とは、貴族階級を素直に尊敬し、たとえ貧困に苦しんでも、その運命を恨まずに生きることを指し、《純な哲学》とは、自分の名声を誇りにし、それだけを大切に守って生きること、そして《心に疚しさのない哲学》とは、真面目な快楽を嫌わず、誠実な女性との交際を避けないで生きることを指すようである。つまり、哲学者とは、完全に世俗社会の中で生き、世俗的な社交や娯楽を楽しみ、社会体制に従順で異を唱えず、自分の名誉を大切に守る人のことである。そして、哲学者の最後の条件は——現代のわれわれから見ると、少々滑稽な感じがするのだが——結婚の重荷から逃れて、独身の自由を守り続けることである。つまり、トデリーニの考えによれば、哲学者とは世俗世界の聖職者のような人でなければならないのである。そして、以上の彼の哲学者像の中には、ヴェネツィア政府の司法官としての基本的な施政方針がはっきりと透けて見えるはずである。それは、いかなる者にも社会秩序の紊乱を許さず、その秩序の中で努力する者には褒賞を与えるという断固たる方針である。

最後に、哲学者がミロードの足元に跪いて許しを請う場面について、トデリーニが

どのようなコメントをしているのかを見てみよう。彼もまたフィエスコ師と同じく、ヤコッベに屈辱の思いを免れさせてやろうとしているが、彼の立論は、聖職者的な擁護論とは異なって、逆に支配階級擁護の立場からなされている。

だが、この哲学によれば、自分より身分の高い貴族に跪くことは、自分の名誉を汚す卑しい行為ではない。君の議論は、ストア派の哲学者の場合には有効かも知れないが、本物の哲学者には無効だ。自分に浴びせられた不当な非難から身を守るために弁解しても、彼が過ちを犯したと白状したわけではない。……彼は罪を犯したわけではないが、《巧妙に》(con arte) 正義と寛容さと慈悲心に訴えて、自分を許してくれるように懇願し、世間の見ている前でパトロンの足元に跪くのを恥とは思わない、と言う。これは外見的には《へつらい》(incensada) だが、当人が失うものは何もないし、人々の虚栄心がくすぐられるように思われる。彼は貴族の好意を勝ち得て、世間に対して自分の名誉を無傷で守るためにそうするのだ³⁹⁾。

ヤコッベの《哲学によれば》——と、トデリーニは断って、これが自分の考えではないことを強調している——哲学者が《自分より身分の高い貴族に跪くことは、自分の名誉を汚す卑しい行為ではない》。確かにこれは、世間からは《へつらい》に見えるが、たとえ跪いても、《当人が失うものは何もない》し、逆に跪かれた貴族の虚栄心がくすぐられる、と言う。ここでは、貴族の足元に跪くことが、《名誉を汚す卑しい行為》や《恥》から、貴族の虚栄心をくすぐって、好意と庇護を勝ち得るための、積極的な《へつらい》の行為へと転化させていれる。その結果、当人には得るもの [= 貴族の恩恵] は沢山あっても、《失うもの [= 当人の名誉!] は何もない》という話になる。こうして、相手の足元に跪くという行為は、その屈辱的な意味を失って、相手の好意獲得の狙いを秘めた儀礼的な行為となり、こうしてヤコッベは屈辱の思いを免れられるのである。

だが、この話は少しおかしいのではないか？ 相手の貴族から、跪くのは卑しい行為でなく、積極的な《へつらい》の行為だよ、と言い聞かされ、本人もそう思い込んでいたとしても、遠くからその光景を見るならば、それは明らかに跪いて許しを請う

行為であり、相手の貴族もそのことは承知の上で、そうでないふりをしているのである。実はトデリーニ自身も、自分が詭弁を使っているという疚しさを抱いていたに違いない。そこで彼は、その儀礼的な行為の代償に、どれほど大きな恩恵と褒賞が得られるものかを力説しようとする。《彼は貴族の好意を勝ち得て、世間に対して自分の名誉を無傷で守る》ことができる、つまり、支配階級である貴族がパトロンとなれば、その富と権力によって、世間の卑しい中傷者どもから完全に守ってもらえるのだから、ささいな屈辱など気にするな、と言うのである。

恐らくはこれを読んだゴルドーニも、この詭弁には気が付いていたと思われる。だが、その彼にしても、トデリーニが572行もの長大なマルテリアーノ詩を執筆して、ヤコッベを同僚の貴族の嘲りから守ってくれたことに感謝する気持ちの方が遥かに大きく、その小さな詐術は黙って見逃そうと思ったに違いない。その4年後にゴルドーニが、ピッテリ版の第4巻を出版した時、彼はその『家政婦たち』(Le Massaie)を恩人のトデリーニに献呈して、次のように感謝している。

私は、閣下が私の作品を褒めて下さっただけでなく、自らペンを取ってそれを弁護し、私の名前を顕彰しようとして下さったことについて、閣下に借りがあることをはっきりと公言する者です⁴⁰⁾。

ヤコッベがミロードの庇護を得るために、相手の足元に跪くという小さな屈辱を耐え忍んでいるように、その親のゴルドーニも、政府の若い司法官に自分の子を庇護してもらうために、その小さな詭弁を何食わぬ顔で見過ごしてやっているのである。『イギリスの哲学者』の舞台はロンドンとなっているが、実はすべてがヴェネツィアを舞台に構想され、上演され、享受されているのである。

【その1、了】

注

- 1) cfr. M. Baratto, *La letteratura teatrale del Settecento in Italia*, Neri Pozza Editore 1985, pp.33-45, 163-212; S. Ferrone, *Carlo Goldoni: Vita, opere, critica, messinscena*, Sansoni 1990, pp.37-94; F. Fido, *Nuova guida a Goldoni*, Einaudi 2000, pp.5-47, 121-135.

- 2) cfr. G. G. Ortolani (a cura di), *Tutte le Opere di Carlo Goldoni*, Mondadori 1935-56, vol. V 1941, pp.1358-9.
- 3) オルトラーニは《歴史的価値》として、さらに《登場人物たちの戯画と風刺》、《同一舞台で複数の物語が同時進行すること》を挙げているが、これらはむしろ《芸術的価値》に属するものと思われるので省いた。また、彼が作品の《芸術的価値》を判断する基準の1つとして、ここでは明確に述べていないが、劇場で実際に上演された場合に、その作品が現代でもまだ生きていて、観客に感銘を与えられるかどうか、という判断基準があるように思われる。これは現代イタリアの批評家が全身全霊を挙げて劇作品と対峙した時に、初めて感じ取られるものであろう。外国人研究者には、イタリア語で書かれた古い作品に対するこの種の遠近法的な感覚が欠けていて、自分なりの別の遠近法的感覚で眺めている可能性があるので、自分の限界（と長所）についてたえず自覚しておく必要がある。
- 4) S. Ferrone, *op. cit.*, pp.76-77.
- 5) M. Baratto, *op. cit.*, p.42
- 6) M. Baratto, *op. cit.*, p.43
- 7) M. Baratto, *op. cit.*, p.44
- 8) cfr. G. Padoan, *I «rusteghi» Todero e i presunti limiti ideologici della borghesia veneziana*, in 《Atti ed Inchieste di Quaderni Veneti 3: Problemi di Critica goldoniani》, Longo Editore 1994, pp.339-61. さらに最新の P. Roman (a cura di), *Il filosofo inglese*, Marsilio 2000, pp.25-26は、この定説に疑問を投げ掛け、その提唱者たちの名前は挙げずに、彼らを一括して《strabismo critico》と呼んでいる。
- 9) G. Padoan, *op. cit.*, pp.342-43.
- 10) クワランティア階層の貴族を含むヴェネツィアのさまざまな社会階層については、斎藤講演記録「18世紀のヴェネツィア社会と市民生活—カルロ・ゴルドーニの演劇を通じて—」、『イタリアーナ』28、2002年4月、pp.2-21に簡単な解説がある。
- 11) P. Roman, *op. cit.*, p.255, vv.3-4
- 12) マルテリアーノ詩とは、Pier Jacopo Martello (1665-1727) がフランスのアレクサンドラン詩を模して作った詩形で、7音節 (settenario) を2つ合わせて14音節の詩行にし、さらに連押韻 (rima baciata) を踏ませるものである。ゴルドーニは、バッフォの批判詩に対して《per le rime》(韻を踏んで) 反駁しているが、バッフォの批判詩72行の連押韻が、反駁詩のvv.17-89において全く同じく繰り返されているだけでなく、ほぼすべての行末の語が同じくそのまま採用されている(例外は、Baffo, v.53: costume, v.54: lumeが、Goldoni, v.70: lume, v.71: costumeと逆転していることと、Baffo, v.64: correlazionが、Goldoni, v.81: unionに変えられていること) だけであり、しかしいずれの場合でも、連押韻の規則は厳密に守られている。
- 13) G. Ortolani, *op. cit.*, Mondadori 1955, vol. XIII, pp.201-213.
- 14) cfr. P. Roman, *op. cit.*, Appendice, pp.253-293.
- 15) P. Roman, *op. cit.*, p.79; G. Ortolani, *op. cit.*, vol.V, p.259.
- 16) Anonimo, *Lo Spirito Forte*, Venezia 1772 (Bibl. Marciana, Drammatica, 1519-1).
- 17) P. Roman, *op. cit.*, pp.90-91; G. Ortolani, *op. cit.*, vol.V, p.270.
- 18) P. Roman, *op. cit.*, p.79; G. Ortolani, *op. cit.*, vol.V, p.259.
- 19) P. Roman, *op. cit.*, pp.94-95; G. Ortolani, *op. cit.*, vol.V, p.273.
- 20) ストア派哲学という名前で暗にカトリックの教義をも指しているのではないかという著者の

疑問については、P.Romanも、他のどの研究者も指摘していないが、ゴルドーニの作品を理解する上で非常に大事な問題点ではないかと考えている。本論その2でもっと詳しく論じる予定にしている。

- 21) P.Roman, *op. cit.*, pp.125-128; G.Ortolani, *op. cit.*, vol.V, pp.294-296.
- 22) P.Roman, *op. cit.*, pp.143-144; G.Ortolani, *op. cit.*, vol.V, pp.306-307.
- 23) Giorgio Baffo (1694-1768) についての情報は、cfr. *Dizionario Biografico degli Italiani*, vol.5, pp.163-166; P.Roman, *op. cit.*, pp.20-31.
- 24) P.Roman, *op. cit.*, p.255; G.Ortolani, *op. cit.*, vol.XIII, p.201, vv.6-12.
- 25) P.Roman, *op. cit.*, p.109; G.Ortolani, *op. cit.*, vol.V, p.283.
- 26) P.Roman, *op. cit.*, p.258; G.Ortolani, *op. cit.*, vol.XIII, p.204, vv.29-36.
- 27) Don Matteo Fiesco (ないし Fiecco) についての唯一の情報源は、cfr. P.Bosisio, *Carlo Gozzi e Goldoni, Una polemica letteraria con versi inediti e rari*, Olschiki 1974, p.388.
- 28) P.Roman, *op. cit.*, p.260, vv.26-35.
- 29) アダムが原罪を負う以前と以後の精神能力の違いは、カトリック教徒にとっては常識のことであるが、著者が要領を得た解説書として参照したのは、C.Mariotti, *L'Immacolata Concezione di Maria ed i francescani*, Quiracchi 1904, pp.1-25である。
- 30) P.Roman, *op. cit.*, p.261, vv.56-67.
- 31) Ferdinando degli Obizzi 侯爵の生涯 (1701 - 1768) については、cfr. P.Roman, *op. cit.*, p.33-34.
- 32) P.Roman, *op. cit.*, p.264, vv.13-24.
- 33) Gasparo Gozzi の生涯 (1713 - 1786) については、cfr. *Dizionario Biografico degli Italiani*, vol.58, pp.247-254. 彼が市民階級出身の Luisa Bergalli と結婚したために、ヴェネツィア貴族の称号を剥奪されたことについては、彼のどの伝記資料にも記載がないが、P.Roman, *op. cit.*, p.267, G.Ortolani, *op. cit.*, vol.XIII, p.207 の Gozzi の擁護詩のタイトルは《Altra risposta del Signor Gasparo Gozzi in lingua venenziana alla critica di S.E. Baffo》となっており、この称号《Signor》は、明らかに市民階級に降格させられたことを示している。ここで使われている貴族の称号は、《S (ua) E (ccellenza)》と《N (obil) H (omo)》であり、弁護士肩書きを持つ Goldoni の場合は《Dottor》である。
- 34) P.Roman, *op. cit.*, p.268; G.Ortolani, *op. cit.*, vol.XIII, p.208, vv.19-40.
- 35) Ferdinando Toderini の生涯 (1727 - 1790) については、cfr. P.Roman, *op. cit.*, p.34; G.Ortolani, *op. cit.*, vol.V, p.1389-1390.
- 36) Goldoni, *La Sposa pesiana* に対する Baffo の称賛については、cfr. G.Ortolani, *op. cit.*, vol.XIII, p.206-207, vv.25-70. Goldoni も Baffo の称賛について触れている。Cfr. P.Roman, *op. cit.*, p.257, G.Ortolani, *op. cit.*, vol.XIII, p.203, vv.7-10.
- 37) P.Roman, *op. cit.*, p.282, vv.201-222.
- 38) P.Roman, *op. cit.*, p.278, vv.48-72.
- 39) P.Roman, *op. cit.*, p.279, vv.97-116.
- 40) G.Ortolani, *op. cit.*, vol.V, p.933.